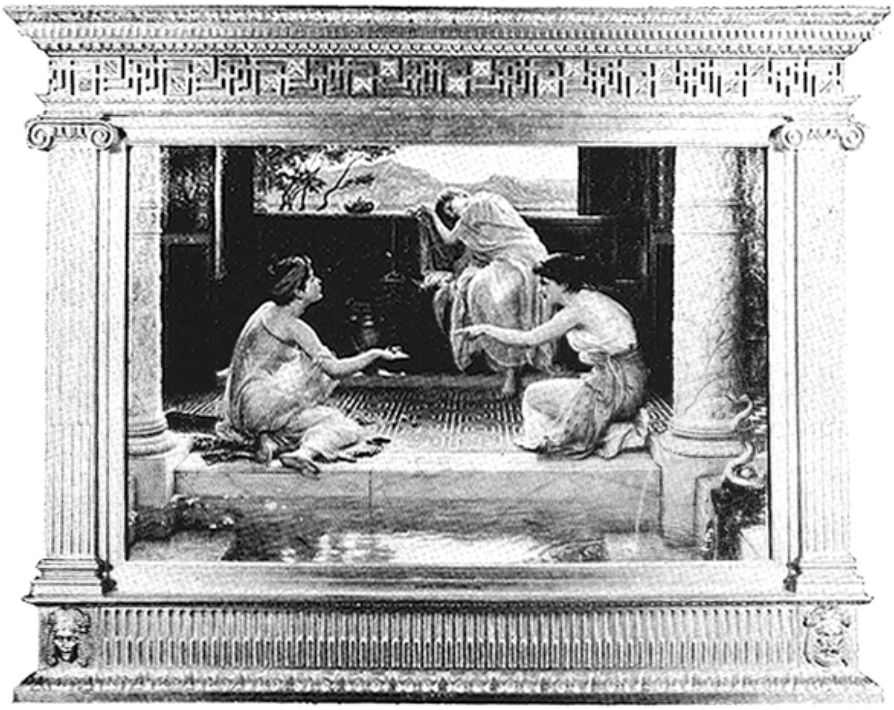
愛知の博物館　No. 28



世界の若かりし頃　1891年作
エドワード・J・ポインター

目　次

◦自然科学博物館の野外活動……松井　保……2
◦市民に開かれた博物館を……大木常雄……4
◦ヘビの特徴……杉山貞幸……6
◦事務局だより……7
◦表紙写真（ポインターとその時代）……木本文平……8

自然科学博物館の野外活動

松　井　　保

博物館管理の悩み

見学を終って帰る見学者から「この博物館は何時来ても開館している、観光者にも研究者にも親切な展示になっている。これが小さな町が経営している博物館とは思えないすばらしい博物館だ!!」とか、「自然の資料が豊富で展示にごまかしがない、ユニークな博物館で実にすばらしい」と言われることがある。博物館の管理を直接担当するものにとっては、このような見学者の言葉は、それが仮にお世辞であっても嬉しく思う。

だが、現実の博物館はそんなすばらしいものではない、一般にはわからない悩みがかくされていて何時も不安であるのが真実の姿である、きょうそのものが自然の歴史を作ろうとしているのに、館員がそれなりに努力して見ても目に見えた実績は仲々あがってこない。

博物館統計で自然系の博物館の入館者の動きを見ていても、著しく向上はしていないのが実態である、それは何が原因しているのであろう？。言うまでもなく一般見学者に興味や感動を興えるような展示のしくみや展示物が少ないことが考えられる。展示物の主なものが剝製・液浸・措葉標本で、実物の自然と比較したら、はるかに異った感覚である、岩石鉱物の標本の如きは自然の地層のなりたちから見なければ、その標本を理解することは困難であろう、故に博物館は見学したが自分たちの勉強に生かすことができないのではないかと思う。

勿論博物館の標本を生かすことの出来る人達にとっては貴重で最高である、記録性があり、郷土の自然の歴史を証明する唯一の実物である。にせものは何一つおいてはいないが、一般には深かく理解されていないので残念である。

博物館の見学者の中には、本当の自然を知らずして見学するものもあるので生態的な展示の改善をすすめているが、これは如何に立派に展示が完成されたとしても偽物の自然にすぎない。

鳳来寺山のふもとにあるこの博物館の方針は「先づ博物館の展示を見て、或は館員に尋ね自然の予備知識を得てから鳳来寺山の実物の自然を自分の目で確かめて下さい」と一般に呼びかけているが、博物館の呼びかけに仲々応えようとはしない、博物館を見学してくれても、バスで鳳来寺山頂に登ってしまう。また逆に、先に鳳来寺山頂へバスで登り下山して来る場合がある。極端なものには「雨が降って困ったから見学させて下さい」と言った見学者もあとをたたないのが実情である。

野外活動の体験

博物館の展示の内容から見て、展示＋野外活動を実践しない限り、本当の自然科学博物館と言うことはできない……と言う認識のもとに開館以来野外活動を実施している、野外活動を実施して見ると参加者から思わぬことを聞かされ驚くことがある。

中央構造線を学ぶ会に参加した高校生が「中央構造線と言うので、山の中のどこかにペンキ

で線を書いたように誰にでもわかるようになっていると思っていた、地層や岩石の予備知識のないものには、構造線を理解することは容易ではないことを初めて知った」とか「モリアオガエルや森の小動物を学ぶ会」に参加した小学生から「モリアオガエルは木に登って産卵するので、一生木に登ったままで生活していて、水がなくては生活できないことは知らなかった」と聞かされた事があった。

夏休みの頃、博物館の窓口で印刷物をひろげ「玄武岩と石灰岩を採集したいが、鳳来寺山のどのあたりに行けばよいか」と小中学生から尋ねられることがある。玄武岩や石灰岩は鳳来寺山の周辺では産出することはない、その児童の学校ではテキストを作り児童を指導しているが、予備知識と言うのを全く無視している？…疑ってはいけないが、おそらく実物を知らずして、フイルードの体験をしないまゝ児童に自然の教育をしている教師もいるように思えてならない。毎回の野外行事に必ず３～４人の学校の教師が参加していて喜ばしく思う。

野外活動の問題点

一人でも多く博物館の野外行事に参加してもらうために「行事計画をつくり、小中高校に配布している、各社の新聞社に協力してもらい新聞紙で行事のＰＲを行っているが配布した印刷物から見て参加者の数は非常に少い、博物館の行事をパンフレットで宣伝することは容易なことではない。

行事と天候とも密接な関係がある、前々から参加者募集、行事内容の充実を考えつとめてきても開催当日雨天になってしまったら何もかも水の泡である。

朝から晴天で、博物館前の橋を館に向って歩いて来るおおぜいの参加者を迎えるときの気持は何とも言えない嬉しさがある、逆に前の日から雨で開催日になっても降り続く雨の日は残念で泣きだしたくなるような気持である。

鳳来寺山の自然観察会
（鳳来寺山自然科学博物館主催）

実施中にも気がやすまらない、不安も伴う、学校と違い開放的になるのか、山や川を歩くのが楽しさでいっぱいのようで自由に跳び歩く、若しかして鳳来寺山の岩場で足を踏みはずしてけがでもしたらどうなるだろうか、死亡事故が若し発生したら館や担当者の運命はどうなってしまうであろう、ちらっと脳裏をかすめることがある、すでに「ボランティア裁判」が良き教訓となっていることを忘れることはない。

それでも自然科学博物館は野外活動を行なわなければ本当の自然科学博物館に育てていくことはできないと思う、野外活動の実践は忍耐のいることである、それに敗けてしまったら博物館はみんなから忘れてしまうような施設になるであろう。

＜鳳来寺山自然科学博物館　係長＞

市民に開かれた博物館を

大　木　常　雄

豊橋市においては昭和42年に図書館、集会場、展示場の３つの機能を持つ豊橋市民文化会館が建設され、以来市民文化振興に大きな役割を果してきたが、昭和51年、市制70周年を記念して専門的文化施設として美術博物館の建設がきめられ、昨年６月１日、豊橋公園(旧吉田城址)の一角に開館された。一階には３つの展示室があり、企画美術展を開催するほか、美術ギャラリーとして一般利用もできるようになっている。また、２階には５つの展示室があり、考古、陶磁器、歴史などの博物館資料を常設展示するほか、特別なテーマに基づく企画展を開催するようになっている。

ただ、ここで博物館というものの社会の中での位置づけをはっきりしておかないと、まことに利用価値のない存在になりかねない。博物館という施設は、公民館、図書館と並んで社会教育の３本の柱となるべき施設で、文部省社会教育局の指導のもとに運営されています。昭和34年に制定された博物館法を根拠にして博物館法の中に、その機能として

① 教育的な活動
② 専門分野の研究
③ 資料の収集保存

の３つが述べられ、これらの活動を行うために、博物館専門職員としての学芸員をおくことが定められている。

もちろん、博物館である以上、前記３つの機能は備えていなければならないが、現在、博物館といっているところでも、そのすべてを備えているわけではない。機能の上からも職員の質の上からも、これら３つの機能のうち、いずれかを重点として活動しているところが多いのが現実である。

ここでは②、専門分野の研究③、資料の収集保存については論じないことにし、①、の教育的な活動の機能について解説を加えることにする。

◎ 教育的な活動

最近はどの博物館でも、できるだけ社会に対して開かれた博物館であるよう努力している面がみられる。ことに地域社会に対するサービスについてである。

地域社会にどうとけこむか、また、その社会の人たちに支持されるかということが、博物館の最も重要なところではないかと思われる。そのためには、いろんな面で地域社会の人たちの要求に応じる必要があろう。

資料の収集、分類、展示を行うのみならず、これを中心にして利用者への助言、指導だけでなく、自主的に講演会、映画会、研究会などを開いたり、あるいは、その地域の団体や図書館その他の施設と連絡をとったりして、市民の教養を高める努力をしなければならない。また、博物館は学校教育の一環として、博物館を十分利用させるよう努力すべきである。現在のところ学校側が博物館の上手な利用法を知らないためか、目的を持って博物館に行くと云うより

も、博物館へ行って何か見るというように見受けられる。時には数百人の児童・生徒の団体が一度にどっと入って大きな建物の中で、広い分野にわたって展示されているものを、馳足で見て廻り立ち去る姿を見ると、何のために博物館にバスをつらねてくるかと疑いたくなるし、また、残念なことに引率の先生の多くは、見学をさせることよりも、列をみださずに見学が無事に終わることに注意をはらってみえる。引率の先生がその気になりさえすれば、もっと効果的な見学ができる筈であるし、また博物館は、もっと地域の学校から利用されるよう学校側と十分な打ち合せをすることが必要であり、児童・生徒が社会見学だけに終らず実物学習ができるよう工夫し、積極的に学校へ呼びかける必要がある。

また、開かれた博物館にするための友の会は、博物館へ人をひきつける力を持つもので、博物館の運営には必要なことだと思う。

次に展示についてであるが、博物館活動において展示が何といってもその中心であり、博物館の顔ともいうべき部分である。何が展示されているか、何が見られるかということが見学者の期待と興味をひくのである。従って展示品の内容、その方法が問題になる。

例えば、展示が陳列から脱却しているか、問題意識や系統性が展示の中にあるか、あるいは、調査研究にのっとり、科学的に分析された資料が展示されているかなどである。

展示資料については、平易なわかりやすい書き方で読みやすく、しかも興味をひくものであるよう心がけなければならない。

豊橋市の場合、展示資料の不足を博物館登録審査の際、金子功審査員（御園天文科学センター所長）から指摘があった。

以上、博物館における教育的な活動を中心にして述べたが、その他、資料の収集、研究活動などを活発に展開する必要があろう。

特に学芸部門のあり方については、若い学芸員の養成その他、考えなければならない重大な課題が多い。自治体の負担による博物館の場合、学芸スタッフを中心とした研究の努力がされない限り、市民の文化センターとなり得ない。市の対処の仕方を考えた場合、やはり行政の面のソツのなさに重点をおく、お役所仕事の範囲を出ていないといえそうである。今後、開かれた博物館として、どう発展させてゆくかは単に市当局の課題だけでなく、市民全体が考えなければならない課題でもあろう。

（豊橋市美術博物館　学芸員）

引用文献

1) 金子　功「豊橋市に本当の博物館を」1974

2) 豊橋美術博物館年報　1979

ヘビの特徴

杉山貞幸

ヘビ類は人間に異和感や異質感を与えても、親近感は与えない（一部には親近感を覚える人もいるが）といわれているが、実際、ヘビ類は人間達にとって異なる生きものだろうか。

自分もヘビセンターに勤めるまでは、ヘビ類に対して親近感は持っていなかった。ヘビセンターに勤めてヘビ類に関する種々の知識を身につけるに及んで、自分がヘビ類に対して持っていた感覚は、ヘビに対する無知と偏見の上に成り立っているものであることに気付いた。

以下は、少しでもヘビ類に対して親近感を持ってもらえるように、ヘビ類に関して述べます。

1） ヘビの分布

全世界には、11科330属2,500〜2,700種のヘビ類がいる。この数はハ虫類の中では1番である。その生活範囲は甚だ広く総ての大陸（南極大陸は除く）に及び、北限はヨーロッパで北緯67°附近、アジアで北緯60°附近、北アメリカで52°附近である。南限はオーストラリアで南緯44°附近、南アメリカで南緯44°附近、アフリカで南緯32°附近である。

ヘビ類は地上生活をするものが大部分だが、樹上で生活するもの、地中で生活するもの、或いは淡水や海水の中で生活するもの、また3,000〜4,000メートルを越える高山に生活するものから、砂漠のような乾燥地帯に生活するものまで、地球上の大抵のところにヘビ類はいる。

2） ヘビの形態

a）ヘビの皮膚

ヘビのからだは鱗で覆われている。同1種のヘビ類では、鱗の並び方、形、数が一定である。従って鱗の配列・形・数によって種の決定が出来る。

ヘビ類は成長するにつれて脱皮をするが、ヘビ類にとって脱皮は、我々が考えているよりも大切なことである。脱皮ができないヘビは死ぬしかない。つまりヘビの生命は脱皮の成否にかかっているわけだ。

ここで脱皮の順番を述べることにする。

1. 鱗の艶がなくなってくる。腹板が黄味を帯びてくる。食欲がなくなる。
2. 体色に変化が現われる。（白っぽくなったり、斑紋が不鮮明になる。）
3. 目が白く濁ってくる。
4. 水に入るようになる。
5. 白濁した目が澄んでくる。
6. 目が澄んでから1週間ぐらいで脱皮が始まる。

一口に脱皮といっても上記のようにかなりのプロセスがあるわけだ。

b）ヘビ類の感覚器官

ⓐ 「目」

ヘビ類の目は近眼であり、エサを探し出すには無理である。（近くにエサが来た場合は見える。）瞳孔の形によって、そのヘビが昼行性であるか夜行性であるか解る。即ち、丸い瞳孔のヘビ類は昼行性で、ネコの目のように切れ長の瞳孔のヘビ類は夜行性である。

ⓑ 「耳」

ヘビ類には外耳も鼓膜もないので、我々が感じるような音は聞きとれない。地面を伝って来る振動によって回りの様子を聞きとる。

ⓒ 「舌」

ヘビ類の舌は食物の味を感じるのではなく臭いを嗅ぐ働きをしている。

今回はこれくらいにしておきます。

ヘビという生きものも見方を変えれば、興味ある生きものです。

（香嵐渓ヘビセンター　学芸員）

事務局だより

◦　9月から岡崎市郷土館が、新しく協会に加盟しました。所在地は、〒444 岡崎市朝日町3丁目36—1 で、昭和44年から開設しています。なお、電話番号は〈0564〉23—1039 です。

◦　9月8日に昭和美術館（財団法人後藤報恩会）の館長後藤啓一さんが、亡くなられ、同月10日、聖徳寺において告別式が執り行なわれました。

◦　9月20日、日本モンキーセンターに類人猿舎がオープンした。世界サル類動物園南部の約2万㎡の丘陵地に造られた猿舎は、鉄筋コンクリート造り890㎡。チンパンジー放飼場、ゴリラ、オランウータン、子ザルなどの屋外運動場も設けられている。

猿舎内は厚さ3㎝の強化ガラスを通して屋内のサルの動きが観察できるほか、人工ほ育室、サルのえさの種類や量が見られる調理室、ゴリラが乗ると自動的に体重が通路の壁面に表示される体重計など、楽しく観察できるよう工夫されている。

◦　10月25日、博物館明治村に「北里研究所本館・医学館」が完成、一般公開された。

日本における伝染病研究の先駆をなした北里柴三郎博士が、大正4年、東京の芝白金に建てたもの。木造2階建天然スレート葺、704.4㎡。

1階の展示室では、細菌学を中心とした明治の医学展を開催。

◦　11月1日、大府市歴史民俗資料館が開館した。大府市桃山町5丁目180の1の通称大倉会館に、福祉会館（4月）、図書館（7月）につづいてオープンしたもの。

広さは1、2階あわせて1,119.59㎡。

明治初期の復元農家を中心に、生活様式を示す展示。米、タバコ等の資料、古窯資料、書画等が展示されている。

開館時間は10時～17時。

表紙写真

エドワード・J・ポインターとその時代

木本文平

エドワード・ジョン・ポインターは19世紀イギリスの歴史・風俗画家で、パリーに生まれグレールに学び、1850年以来ロンドンのロイヤル・アカデミー（1776年ジョージ三世設立。）に出品し、ポインターと同時代のフレデリック・レイトン卿、ロレンス・アルタデマ卿とともにヴィクトリア王朝時代の代表的な歴史・風俗画家として知られた。

また、ローヤル・インステュートの水彩画会員であり、ソサェティー・オブ・ブリティシュ・アートの名誉会員でもあった。後に、Sirの称号を授けられた。

この「世界の若かりし頃」と題する作品は、古代ギリシャ美人をテーマにヴィクトリア王朝繁栄時代の理想を表現し、この画家の代表作の一つとみられている。

彼の生きた時代は、その前後を通じて社会的には産業革命が起っており複雑な世相が生じていた。絵画について言えば、一般には中産市民階級のいわゆる穏健な趣味に適応して「ロイヤル・アカデミー」の類型的絵画がもてはやされ、教訓的な、または逸話風な物語り絵が多かったという。

一口に19世紀イギリス絵画というと、即座に返る言葉は19世紀前ロマン主義的風潮と結びついたカンスタブル、タナーを代表とする風景画のピーク時であることと、19世紀イギリス絵画界に深い影身を投じたウィリアム・ブレイクの系統があった。また、視点を大陸にうつすと、19世紀末期より20世紀初頭にかけての美術界の流れは、写実主義のドーミエ、クールベ。バルビゾン派のルソー、ミレー。そして印象主義のマネ・モネ、ゴッホ。新印象主義のスーラにセザンス。象徴主義のルドン。ゴーギャン。1905年以来フォービズムのマチス。そして、キュービズムに至る激しいうず巻きがこの頃のヨーロッパ美術界をとりまいていた。もちろんこのうず巻きの中には、先に記した作家も含めて今日私達の知る多くの芸術家達が息づいていた良き時代であることを知っている。

このような状況の中でイギリス絵画界は、前述のターナーやブレイク系統の他に美術史上特異な光をはなった、ラファエル前派（根底にはブレイクの影響を受ける）の運動が起った。と、同時にこのポインター自身も生きており、また、彼の作品も生きていた。

<愛知県美術館員>

「愛知の博物館」 No. 28

発行日 昭和55年12月

編集・発行 愛知県博物館協会
名古屋市東区東桜一丁目12番1号
愛知県文化会館内
〈052〉971－5511